

萩の会

作曲家・萩原英彦(1933～2001)

を偲び、その業績を顕彰する会

萩の会コンサート

『萩原英彦作品の夕』

～歌の心をすべての音譜に込めた作曲家～

バッハを愛し、モーツァルトをそしてシューベルトを愛し、またフランス音楽をこよなく愛した孤高の作曲家・萩原英彦は常に音楽と向き合い、その生涯を音楽に捧げたといっても過言ではないでしょう。ピアノが大好きだった彼は、しかし日本語の美しさに魅せられ、それを歌にのせ如何に美しく表現するかを心をくだいた。そしてその作品の行間には歌が溢れているのです。



日時:2006年1月27(金) PM6:30

会場:旧東京音楽学校「奏楽堂」

主催:萩の会 協力:日本合唱協会

● プログラム
萩原英彦作品

I もみの木男声合唱団

指揮 久住 祐実男

1. お月さん
2. 山羊の月夜
3. 橋を渡って林の道へ

II 浦和女声合唱団

指揮 岸 信介
ピアノ 法島 晶子

「十五の小品」より

1. すみれ
2. つきのなか
3. なのはなさん
4. ちいさなこもりうた
5. かいがらからから
6. むぎわらぼうし
7. ゆうやけ
8. クリスマスのよるだから

III ピアノソロ

大屋 浩太郎

「エチュード・アルモニーク」より

“旋律と和声の表情のために”

1. お人形のうた
2. ノスタルジー
3. 青白いさざなみ

“デュナーミクの変化のために”

1. 朝の歌
2. 石けり
3. タペの歌

“応用曲集”より

華やかな円舞曲(サンサーンスの手法による)

— 休 憩 —

IV 登戸混声合唱団

指揮 片野 秀俊
ピアノ 井熊 康子

萩原英彦編曲による「日本の唱歌」より

1. 故郷(ふるさと)
2. 茶摘
3. 夏は来ぬ
4. 海
5. 野菊
6. 紅葉
7. 雪
8. ふじの山

V 日本合唱協会

指揮 北原 幸男
ピアノ 大屋 浩太郎

「光る砂漠」より

1. 再会
2. 早春
3. 秋の午後
4. ふるさと

「萩原 英彦作品の夕」に寄せて

萩の会会長 田中まり子

このたび「萩原作品の夕」を奏楽堂で開催する運びとなり「萩の会」としても何よりのよろこびでございます。又日頃お力添えを頂いている会員の皆様に心より御礼申し上げます。

本日の指揮は北原幸男先生をお迎えし、岸信介・久住祐実男・片野秀俊 諸先生のもとに 浦和女声合唱団・もみの木男声合唱団・登戸混声合唱団・日本合唱協会による演奏がなされ、加えてピアニスト大屋浩太郎氏による珠玉のピアノ作品「エチュード・アルモニーク」も、花をそえることでありましょう。

「光る砂漠」は不朽の名作で、常に高い評価を受けており、「ふるさとの歌」「十五の小品」「山羊の月夜」等々いずれも萩原先生の深い信仰と透徹した理論に裏付けされた高貴で美しい作品で、本日のすばらしい演奏によって一層輝きを増し、上野の森にこだまして神のみもとにいらっしゃる先生に届くことを信じております。
(ピアニスト)

●プロフィール



萩原 英彦 (はぎはら・ひでひこ 1933年～2001) 作曲

1933年東京に生れる。幼い頃より音楽と自然現象に興味を寄せる。1952年東京芸術大学作曲科入学。1956年東京芸術大学作曲科卒業。在学中、作曲を池内友次郎、ピアノを永井進に学ぶ。フェリス女学院短期大学、お茶ノ水大学講師、武蔵野音楽大学教授作曲学科長を歴任。2001年10月16日没。日本合唱協会名誉作曲家。

主要作品・2群の混声合唱と管弦楽のための「詩篇第104編」(1987)混声合唱組曲「星の生れる夜」をはじめ、室内楽、ピアノ曲など。なお日本合唱協会による文化庁芸術祭参加作品「光る砂漠」(1971)「白い木馬」(1974)「動物たちのコラル第2集」(1982)の諸作品は芸術祭優秀賞を受賞している。



北原 幸男 (きたはら・ゆきお) 指揮

桐朋学園大学卒業。卒業後NHK交響楽団指揮研究員となる。その後タングルウッド音楽祭で小澤征爾の指導を受ける。1985年ブラハの春国際コンクール第3位入賞。1992年までインスブルック州立歌劇場専属指揮者として活躍。ヨーロッパを中心に国際的評価を高めていった。1992年ドイツのアーヘン市立歌劇場および同管弦楽団の常任指揮者、1993年には音楽総監督に就任し、1996年まで勤めた。

その間、ハノーファー、キール、ダルムシュタット、クレフェルト(以上ドイツ)、ブラハ各オペラハウス、リンツ・ブルックナー管、北ドイツ響、バスク国立管、カタロニア室内管、ブラハ放送響、ブダペスト響、ブカレストフィル、北イスラエル響などに客演。国内でもN響定期はじめ各地の多くのオーケストラとのコンサートに招かれると共にオペラの公演の指揮でも高い評価を受けている。都響との「ショスタコーヴィチ:交響曲第5番」がライブ録音でCD化されている。1993年グローバル音楽奨励賞受賞。武蔵野音楽大学助教授、エリザベト音楽大学客員教授。



大屋 浩太郎 (おおや・こうたろう) ピアノ

武蔵野音楽大学・同大学院終了。ピアノを青山三郎、石川哲朗、リディア・コズヴェックの各氏に師事。1985年からリサイタルを各地で開催。1989年フランス国営放送に、1990年イタリア国営放送に出演、1991年東京交響楽団とラフマニノフの協奏曲を共演。これまでに多数のオーディション、コンクールに入選。現在、昭和音楽大学、昭和音楽芸術院・聖ヶ丘福祉専門学校講師。日本合唱協会専属ピアニスト。ソロ活動の他、声楽、合唱、オペラ、アンサンブルのピアニストとして全国各地で多数の演奏会に出演、またレコーディングTVラジオ等で活躍中。

日本合唱協会 (通称“日唱”)は1963年に発足した日本初のプロ室内合唱団で、緻密なアンサンブルと透明なハーモニー、人間性に根ざした豊かな音楽性は高い評価を得ている。レパートリーは邦人作品を含め中世・ルネッサンスから現代に及ぶ。演奏活動は年間5回の定期演奏会、コーラスサロン、特別演奏会の他地方公演、各地の学校演奏で全国余すところなく足跡を残している。一方 TV・ラジオにも多く出演し、レコードも多い。1966、69、78年文化庁芸術祭優秀賞、その他これまでに数々の賞を受けている。

もみの木男声合唱団 1998年春に横浜市青葉区の東急「田園都市線あざみの駅」周辺で6名で結成し、7年を経過して現在28名。60歳から84歳の男性の集まりの平均年齢は70歳を超えるようになった。結成時からア・カペラ男声4部のハーモニーを楽しみ、地元合唱祭に出演していたが、「カミナリ合唱団」と冷やかされる程度のものであった。

2001年10月から指導者に久住 祐実男を迎えて、ハーモニーとは何か、アンサンブルとは何かを学び始め、今回初めて都心で演奏する機会を得ることが出来た。今年の練習曲は、清水脩作曲の「男声組曲・月光とピエロ」で、秋のコンサートで発表することを計画している。「月光とピエロ」を歌いたい人の参加を願っている。

連絡先 小田切 貞之 TEL・FAX 045-903-0565

浦和女声合唱団 1977年 指揮者に岸 信介を迎え、浦和市（現在はさいたま市）の幼稚園のおかあさん8名で発足。演奏会の開催や海外演奏（1994年スイス・モントル国際合唱フェスティバル、2001年ハンガリー建国1000年「ジャパンデー・イン・ブタペスト」）、「妨の会演奏会」、合唱コンクール、おかあさんコーラス全国大会等に出場しているうちに、いつの間にか人の輪が広がり、現在団員53名。2007年春に「創立30周年記念演奏会」を開催予定。

お洒落で可愛いくて心癒される「十五の小品」は、浦和女声合唱団の発足からの愛唱歌である。生前、萩原先生にはるばる浦和にお越しいただき、「光る砂漠」「十五の小品」をご指導していただく機会に恵まれた。日本語の美しさを教えてくださり、機知に富んだ先生の魅力溢れるお人柄に感動したあの日が、昨日のように思い出される。

連絡先 中島 文子 TEL・FAX 048-833-5414

登戸混声合唱団 昨年創立25周年を迎えた登戸混声合唱団は、コンサートや合唱祭出演のほか、隔年の海外演奏旅行等、独自の活動をしています。

1988年に始めたチャリティ「ひとひらのあいコンサート」は、地域に根づいて今年で19回となり、団として最も大切にしている行事である。心身に障害をもつ方々やお年寄りの方をご招待し、一般のお客さまと共生のひとつときを楽しんでいただいている。当日、会場で寄せられる募金も多額に及び、毎年社会福祉のために寄付をしている。また、多摩地区合唱連盟や東京都合唱連盟の理事団体として、それぞれの合唱音楽の普及活動にかかわっている。

1995年以来、海外演奏旅行を行い、これまでアメリカ、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリー、ギリシャを歴訪、11都市で交流コンサートを開催してきた。今年4月には第6回海外演奏として、スペイン、ポルトガルを訪問する予定である。創立以来の常任指揮者・片野秀俊（日本合唱協会指揮者）は、当団生みの親であり、育ての親でもある。

練習日…毎週火曜 19:00～21:00/場所…多摩市民会館 連絡先 根村 道子 TEL 03-3430-5168



「萩の会」～萩原 英彦 を偲ぶ会

2001年10月16日永眠された作曲家・萩原英彦を偲びまた氏の業績を顕彰するための会を「萩の会」と名付けて2002年4月23日に設立いたしました。

【趣 旨】

萩原英彦は日本を代表する抒情派の作曲家の一人で、美しい日本語を基調とした温かくふくよかな旋律とハーモニーは聞く人の心を捉えて離しません。そしてピアノ曲や伴奏部分又管弦楽に見せる多彩さは見事という他はありません。これらの作品の演奏はまた、決して安易なものでもなく真摯な取り組みが要求されるだけに演奏し甲斐のある作品群となっています。更に唱歌・童謡の編曲では原曲の美しさ楽しさを損なわず、むしろ高揚させその心を人々に伝えていきます。

又、氏の芸術一般に対する見識の高さは知識の広さとともに物の本質を見抜く目の確かさの証明であり、それが後進の指導・育成にも力を発揮した事は良く知られたところであります。

その生涯を全身全霊をもって音楽に捧げた萩原英彦を偲び、「萩の会」では氏の業績を顕彰し、その作品が永く歌い継がれることを推進し、下記の活動を行なっております。

【活 動】

1. 萩原作品を演奏するコンサートを随時開催する。
2. 作品目録を整備作成する。
3. その他これらに付帯する事業を行なう。

【会 員】

1. 会員資格 萩原作品を愛し、会の趣旨に賛同下さる個人または団体。
2. 会員登録 終身会員として登録されます。（会員番号は不変）
3. 会員特典 萩の会関係催し物等のご案内。萩の会資料の閲覧。
4. 入 会 金（終身会費） 一口 5,000円（お一人一口以上）。団体は二口以上。
5. 入会手続 所定の入会申込書で事務局にお申込下さい。
6. 会員募集 随時行なう

【事 務 局】

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南1-11-19 日本合唱協会 内 「萩の会事務局」

TEL. 03-3791-4088 FAX. 03-3791-4077 URL <http://www2.odn.ne.jp/~au86650>

E-mail nissho@par.odn.ne.jp

歌 詞

1. お月さん

周郷 博

枯れ草はらの お月さん
一人ぼっちの お月さん
風に吹かれてる お月さん
草の匂いの お月さん
日の暮れかけた お月さん
夜の始まる お月さん
磨きみがいた お月さん
犬が吼えている お月さん
明かりが点いた お月さん
揺れているよな お月さん
遠くて近い お月さん
春のはじめの お月さん お月さん

2. 山羊の月夜

もう冬ではないが
まだ春には間のある 静かな月夜
人影に少し鳴いて
また静かにしてる 月夜の山羊
お前が柵の中にいる姿が
そこだけぽっかり明るい
お前は春になると 母になる
こんな晩に そこへ脚を折って
たった一人で 何を思ってる
春の緑の野か 生れてくる子のことか
スバルは頭上を 通り過ぎ
春の星が
東の空に 昇って来たぞ

3. 橋を渡って林の道へ

橋を渡って 林の道へ
秋の終わりの 晴れた日だった
橋を渡って 林の道へ
林を出ると 野原になった
野原の先は 森があつて
森のはずれに 街があつた
橋のそばで 釣りをした
二人の子供と 野原を駆け回る
橋を渡って ラララララ
一人で林に行った
橋を渡って 林の道へ
秋の終わりの 晴れた日だった

「十五の小品」より

1. すみれ

三木 露風

すみれ すみれ 紫すみれ
山路にさいた つぼみすみれ

あちらの堇は 匂いがない
いくらかいでも 昔から

こちらの堇 一ぱいに
花の壺から たちのぼる

国の境の かげひなた
誰が二つに 分けたやら

2. つきのなか

佐藤 義美

月の中には 菜の花が一ぱい
菜の花 菜の花

月の中から 風は黄いろい
菜の花が とんで来るから

菜の花 菜の花
菜の花はつめたい 月の中では

3. なのはなさん

関根 栄一

なのはな なのはな なのはなさん
ちょうちょうに なつたの よかつたね
ちらちら ひらひら ちょうちょうに

ちょうちょう ちょうちょう ちょうちょうさん
もいちど おはなに になりたいの
なんなん なのはな ののはなに

4. ちいさなこもりうた

こわせたまみ

ちいさな ちいさな ねいきを たてて
ほら あかちゃんか ねんねしたよ
ちらちら はっぱ みどりの はっぱ
その てを その てを ゆらしておくれ

ちいさな ちいさな はもれびだつて
ほら あかちゃんは まぶしいよ
ちらちら はっぱ みどりの はっぱ
その てを そのてを ひろげておくれ
やさしいおひさま かくして かくしておくれ

5. かいがらからから
やどかりが わすれたの
きょうで みっか
すなに おいてきぼり
かいがら からから

やどかりを まってるの
きょうも だまって
うみは あつい ひざかり
かいがら かいがら

やどかりは いつくるの
きょうで みっか
なみに みみを すませる
かいがら かいがら

6. むぎわらぼうし (麦藁帽子) 立原 道造
八月の金 (きん) と緑の微風 (そよかぜ) のなかで
眼に沁みる爽やかな麦藁帽子は
黄いろな 淡い 花々のようだ
甘いにおいと光 (と) にみちて
それらの花が咲きにおうとき
蝶よりも 小鳥らよりも
もっと優しい生き者たちが挨拶する

7. ゆうやけ 今井 義子
ゆうやけ ゆうやけ あかるいな
まっかな まっかな そらのくも
おひさま どこへ いくのかな
さよなら さよなら またあした

ゆうやけ ゆうやけ きえてゆく
だんだん だんだん くらくなる
おひさま どこで ねるのかな
さよなら さよなら またあした

8. クリスマスのよるだから 内藤 苑子
クリスマスよるのよるだから
きれいなあかりが
とります

クリスマスよるのよるだから
ひいらぎのはが
ひかります

こわせたまみ
クリスマスよるのよるだから
マリアさまが
ほほえみます

クリスマスよるのよるだから
しずかなうたが
きこえます

萩原英彦編曲による「日本の唱歌」より

1. 故郷 (ふるさと)

高野辰之

兎追いしかの山
小鮎釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

いかにいます父母
恙 (つが) なしや 友がき
雨に風につけても
思いいずる故郷

志を果たして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷
水は清き故郷

2. 茶摘 (ちやつみ) 作詞者不詳
夏も近づく八十八夜、
野にも山にも若葉が茂る。
「あれに見えるは茶摘じゃないか。
あかねだすきに菅 (すげ) の笠。」

日和 (ひより) つづきの今日此頃 (このごろ) を、
心のどかに摘みつつ歌う。
「摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ。
摘まにや日本の茶にならぬ。」

3. 夏は来ぬ

佐々木信綱

卯の花の、匂う垣根に
時鳥 (ほととぎす)、早も来鳴きて
忍音 (しのびね) もらす、夏は来ぬ

さみだれの、そそぐ山田に
早乙女が裳裾 (もすそ) ぬらして
玉苗 (たまなえ) 植うる、夏は来ぬ

橘の、薫るのきばの
窓近く、蛍飛びかい
おこたり諫 (いさ) むる、夏は来ぬ

棟 (おうち) ちる、川辺の宿の
門 (かど) 遠く、水鶏 (くいな) 声して
夕月すずしき、夏は来ぬ

五月 (さつき) やみ、蛍飛びかい
水鶏鳴き、卯の花咲きて
早苗植えわたす、夏は来ぬ

4. 海

作詞者不詳

松原遠く 消ゆるところ
白帆の影は 浮かぶ
干網浜に 高くして
鷗は低く 波に飛ぶ
見よ昼の海 見よ昼の海

島山間に しるきあたり
漁火 (いさりび) 光淡し
寄る波岸に 緩くして
浦風かろく いさご吹く
見よ夜の海 見よ夜の海

5. 野 菊

石森延男

遠い山から 吹いて来る
こ寒い風に ゆれながら
けだかく きよくにおう花
きれいな野菊 うすむらさきよ

秋の日ざしを あびてとぶ
とんぼをかるく 休ませて
しずかに咲いた 野べの花
やさしい野菊 うすむらさきよ

しもがおりても まけないで
野原や山に むれて咲き
秋のなごりを おしむ花
あかるい野菊 うすむらさきよ

6. 紅 葉

高野辰之

秋の夕日に 照る山紅葉
濃いも薄いも 数ある中に
松をいろどる 楓や蔦は
山のふもとの 裾模様

溪 (たに) の流に 散り浮く紅葉
波にゆられて 離れて寄って
赤や黄色の 色さまさまに
水の上にも 織る錦

7. 雪

作詞者不詳

雪やこんこ 霰 (あられ) やこんこ
降っては降っては ずんずん積もる
山も野原も 綿帽子かぶり
枯木残らず 花が咲く

雪やこんこ 霰やこんこ
降っても降っても まだ降り止まぬ
犬は喜び 庭かけまわり
猫は火燵 (こたつ) で 丸くなる

8. ふじの山

巖谷小波

あたまを雲の上にだし
四方の山を見おろして
かみなりさまを下にきく
ふじは日本一の山

青ぞら高くそびえたち
からだに雪のきものきて
かすみのすそをとおくひく
ふじは日本一の山

「 光る砂漠 」より

1. 再会

誰もいない
校庭をめぐって
松の下にきたら
秋がひっそりと立っていた

私は黙って手をのぼし
秋も黙って手をのぼし
まばたきもせずに見つめ合った

2. 早春

雀の声の変わったような
青い空がかすむような
ああ土のいおいがかぎたい
その春にほおずりしたい
何を求めているのやら
ああ土の上を駆けまわりたい
きっとしまっているような
淡い眠りの中の夢のような
生きなければいけないけれど
何だか死んでもいいような
まぶたの中に浮かぶような
去年の春 女 (あのみと) がくれた山桜

3. 秋の午後

やさしい日の光が
庭や
薄紅いカンナの花や
道や草原を
そととつみこむ
(繰り返す)

若いきれいな奥さんが
赤ン坊を抱いて
ほほ笑むまわりを
舞踏する
ああ乳の愛(あまい匂い)が
青空にこだまして
私の心をゆるするみたいだ

矢澤 幸 4. ふるさと

(一)

ふるさとは
ただ静にその懷に
わたしを連れこんだ
雲でもなく幻でもなく
生きた眼と心を持って
わたしははいていった
青いにおいにおむせかえって
ことばもなく
遠い日の記憶が
足からよみがえった

(二)

水は白い壁と天井と共に
命の中にあり
ふるさとの山にあった
苔むした岩肌をたたき
その響きは命の中にも流れていた
手をさし入れて
静寂の中で二つの水が混ったとき
まぶしい輝きを覚え
「山に水を返した」と思った

「萩の会」登混演奏曲歌詞

「ふじの山」

巖谷小波作詞 作曲者不詳 文部省唱歌
明治43年7月『尋常小学読本唱歌』

あたまを雲の上にだし
四方の山を見おろして
かみなりさまを下にきく
ふじは日本一の山

青ぞら高くそびえたち
からだに雪のきものきて
かすみのすそをとおくひく
ふじは日本一の山

「海」

作詞・作曲者不詳 文部省唱歌
大正2年5月『尋常小学唱歌(5)』

松原遠く 消ゆるところ
白帆の影は 浮かぶ
干網浜に 高くして
鷗は低く 波に飛ぶ
見よ昼の海 見よ昼の海

島山闇に しるきあたり
漁火(いさりび) 光淡し
寄る波岸に 緩くして
浦風かろく いさご吹く
見よ夜の海 見よ夜の海

「紅葉」

高野辰之作詞 岡野貞一作曲
明治44年6月『尋常小学唱歌』

秋の夕日に 照る山紅葉
濃いも薄いも 数ある中に
松をいろいろ 楓や蔦は
山のふもとの 裾模様

溪(たに)の流れに 散り浮く紅葉
波にゆられて 離れて寄って
赤や黄色の 色さまざまに
水の上にも 織る錦

「雪」

作詞・作曲者不詳 文部省唱歌
明治44年6月『尋常小学唱歌(2)』

雪やこんこ 霰(あられ) やこんこ
降っては降っては ずんずん積もる
山も野原も 綿帽子かぶり
枯木残らず 花が咲く

雪やこんこ 霰やこんこ
降っても降っても まだ降り止まぬ
犬は喜び 庭駆けまわり
猫は火燵(こたつ)で 丸くなる

「故郷(ふるさと)」

高野辰之作詞 岡野貞一作曲
大正3年6月『尋常小学唱歌(6)』

兔追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

いかにいます父母)
恙(つつが)なしや 友がき
雨に風につけても
思いいずる故郷

志(こころざし)を果たして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷
水は清き故郷

☆ この頁は主として『日本唱歌集』(岩波文庫)
及び『美しき日本の歌』(野ばら社)から、
次頁は主として『日本唱歌全集』(音楽の友社)
から取りました。

「夏は来ぬ」

佐々木信綱作詞・小山作之助作曲
明治 29 年 5 月『新編教育唱歌集(5)』

卯(う)の花の、匂う垣根に
時鳥(ほととぎす)、早も来鳴きて
忍音(しのびね)もらす、夏は来ぬ

さみだれの、そそぐ山田に
早乙女(さおとめ)が、裳裾(もすそ)ぬらして
玉苗(たまなえ)植うる、夏は来ぬ

橘(たちばな)の、薫るのきばの
窓近く、蛍飛びかい
おこたり諫(いさ)むる、夏は来ぬ

棟(おうち)ちる、川辺の宿の
門(かど)遠く、水鶏(くいな)声して
夕月(ゆづき)すずしき、夏は来ぬ

五月(さつき)やみ、蛍飛びかい
水鶏(くいな)鳴き、卯の花咲きて
早苗(さなえ)植えわたす、夏は来ぬ
<注>

★棟(あうち)
あふち。おうち。梅檀(せんたん)の古名。センダン科
落葉高木。四国、九州の暖地沿海地に自生。庭木、
街路樹として植栽。材は家具、果実は薬用。

★水鶏(くいな)
クイナ科の水鳥。全長約 30cm の茶色の鳥。水辺の草
むらに住む。鳴き声が戸を叩く音に似ているのは、
夏鳥のヒクイナ。
※第 2 節「早乙女」は、原作では「賤(しず)の女」と
ある。

「茶摘(ちやつみ)」

作詞・作曲不詳 文部省唱歌
明治 45 年 3 月『尋常小学唱歌(3)』

夏も近づく八十八夜、
野にも山にも若葉が茂る。
「あれに見えるは茶摘じゃないか。
あかねだすきに菅(すげ)の笠。」

日和(ひより)つづきの今日此頃(このごろ)を、
心のどかに摘みつづ歌う。
「摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ。
摘まにや日本の茶にならぬ。」

「鯉のぼり」

作詞・作曲不詳 文部省唱歌
大正 2 年 5 月『尋常小学唱歌(5)』

薨(いらか)の波と雲の波、
重なる波の中空(なかぞら)を、
橘(たちばな)かおる朝風に、
高く泳ぐや、鯉のぼり。

開ける広きその口に、
舟をも呑まん様(さま)見えて、
ゆたかに振(ふる)う尾鱗(おひれ)には、
物に動ぜぬ姿あり。

百瀬(ももせ)の滝を登りなば、
忽(たちま)ち竜(りゅう)になりぬべき、
わが身に似よや男子(おのごと)、
空に躍(おど)るや鯉のぼり。

「野菊」

石森延男作詞・下総皖一作曲
昭和 17 年 3 月『初等科音楽(1)』

遠い山から 吹いて来る
こ寒い風に ゆれながら
けだかく きよくにおう花
きれいな野菊(のぎく) うすむらさきよ

秋の日ざしを あびてとぶ
とんぼをかるく 休ませて
しずかに咲いた 野べの花
やさしい野菊 うすむらさきよ

しもがおりても まけないで
野原や山に むれて咲き
秋のなごりを おしむ花
あかるい野菊 うすむらさきよ